

無限次元ベクトル空間のはなし

松本 敏隆 (静岡大学理学部)

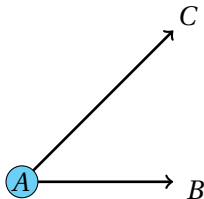


2019年5月23日(木)
サイエンスカフェ in 静岡

1. ベクトルって?

- 中学校では
理科で登場する力の向きと大きさを表す矢印。

問: A にある重りを $A \rightarrow B$ 方向と $A \rightarrow C$ 方向に
矢印の長さに応じた力で引くとき, どの方向に
どれくらいの大きさの力が働く?

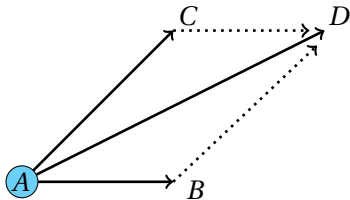


1. ベクトルって？

- 中学校では
理科で登場する力の向きと大きさを表す矢印。

問: A にある重りを $A \rightarrow B$ 方向と $A \rightarrow C$ 方向に
矢印の長さに応じた力で引くとき、どの方向に
どれくらいの大きさの力が働く？

答: AB と AC を 2 辺とする平行四辺形を
 $ABCD$ とすると、対角線である
 $A \rightarrow D$ 方向に線分 AD の長さ
に応じた力が働く。



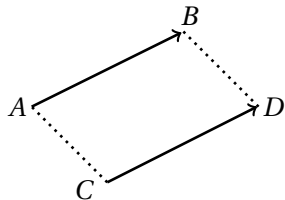
- 高校では

(1) 向きと大きさを表す矢印

A を始点, B を終点という.

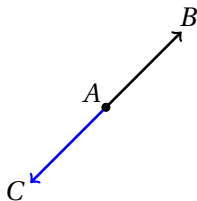
平行移動によって一致するものは
同じと見做す.

$$\overrightarrow{AB} = \overrightarrow{CD}.$$



\overrightarrow{AB} と長さが同じで向きが逆のベクトルを
 $-\overrightarrow{AB}$ で表す.

$$\overrightarrow{AC} = -\overrightarrow{AB}.$$



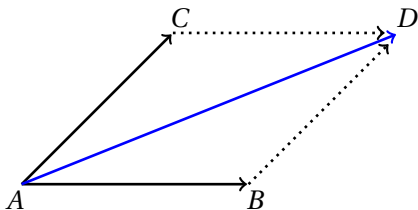
ベクトルの和と実数倍

図の \vec{AB} と \vec{AC} の和 $\vec{AB} + \vec{AC}$ を定義しよう.

AB, AC を 2 辺とする平行四辺形 $ABCD$ を考えて

$$\vec{AB} + \vec{AC} = \vec{AD}$$

と定める.



ベクトルの和と実数倍

図の \vec{AB} と \vec{AC} の和 $\vec{AB} + \vec{AC}$ を定義しよう.

AB, AC を 2 辺とする平行四辺形 $ABCD$ を考えて

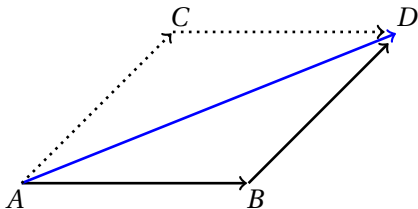
$$\vec{AB} + \vec{AC} = \vec{AD}$$

と定める. \vec{AC} と \vec{BD} は同じベクトルなので

$$\vec{AB} + \vec{BD} = \vec{AD}$$

と考えてもよい. 定義から和の順序を変えても同じである.

$$\vec{AC} + \vec{AB} = \vec{AB} + \vec{AC}.$$



- 実数 \times ベクトル

λ を実数とする. λ と \overrightarrow{AB} の積 $\lambda\overrightarrow{AB}$ をつぎで定義する:

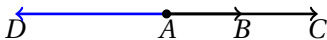
$\lambda > 0$ のとき 向きが同じで長さが \overrightarrow{AB} の λ 倍のベクトル

$\lambda = 0$ のとき $\vec{0}$

$\lambda < 0$ のとき 向きが逆で長さが \overrightarrow{AB} の $-\lambda$ 倍のベクトル

$$\overrightarrow{AC} = 2\overrightarrow{AB}$$

$$\overrightarrow{AD} = -2\overrightarrow{AB}.$$



(2) ベクトルの成分表示

平面に座標軸を描いて、始点を原点に固定する. $A(1,0)$, $B(0,1)$ とし,

$$\vec{e}_1 = \overrightarrow{OA}, \quad \vec{e}_2 = \overrightarrow{OB}$$

とおく. 例えば, $P(3,2)$ は

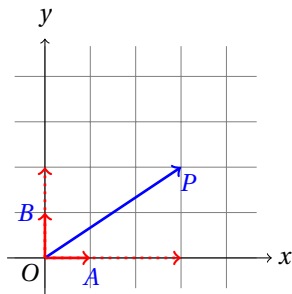
$$\overrightarrow{OP} = 3\vec{e}_1 + 2\vec{e}_2$$

と一意的に表すことが出来る.

任意の点 $P(a_1, a_2)$ に対して \overrightarrow{OP} は \vec{e}_1 , \vec{e}_2 を用いて一意的に書ける:

$$\overrightarrow{OP} = a_1\vec{e}_1 + a_2\vec{e}_2.$$

\vec{e}_1 , \vec{e}_2 を完全正規直交系といい, $\overrightarrow{OP} = (a_1, a_2)$ を成分表示という.



成分表示した場合の $\vec{f} = (a_1, a_2)$ と $\vec{g} = (b_1, b_2)$ の和, 実数倍はつぎのようになる:

$$\begin{aligned}\vec{f} + \vec{g} &= (a_1 + b_1, a_2 + b_2), \\ \lambda \vec{f} &= (\lambda a_1, \lambda a_2).\end{aligned}$$

ベクトル $\vec{f} = (a_1, a_2)$ の大きさ (長さ) を $\|\vec{f}\|$ で表すと

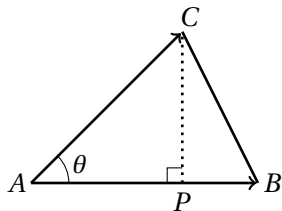
$$\|\vec{f}\| = \sqrt{a_1^2 + a_2^2}.$$

$\|\cdot\|$ をノルムという.

2. ベクトルの内積

三角形 ABC の頂点 A を始点とする
ベクトル \overrightarrow{AB} , \overrightarrow{AC} の内積を次で定める:

$$\begin{aligned}(\overrightarrow{AB}, \overrightarrow{AC}) &= \overline{AB} \cdot \overline{AC} \cos \theta \\ &= \overline{AB} \cdot \overline{AP}.\end{aligned}$$



成分表示では $\vec{f} = (a_1, a_2)$ と $\vec{g} = (b_1, b_2)$ の内積は

$$(\vec{f}, \vec{g}) = \|\vec{f}\| \cdot \|\vec{g}\| \cos \theta = a_1 b_1 + a_2 b_2.$$

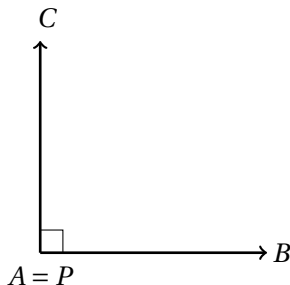
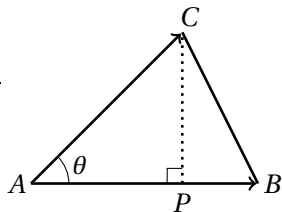
ベクトルのノルム (大きさ) は内積を用いて表すことができる:

$$\|\vec{f}\| = \sqrt{(\vec{f}, \vec{f})} = \sqrt{a_1^2 + a_2^2}.$$

特に $\overrightarrow{AB} \perp \overrightarrow{AC}$ と $(\overrightarrow{AB}, \overrightarrow{AC}) = 0$ は同値である.

実際

$$\begin{aligned}(\overrightarrow{AB}, \overrightarrow{AC}) &= \overline{AB} \cdot \overline{AC} \cos 90^\circ \\ &= \overline{AB} \cdot \overline{AP} = 0.\end{aligned}$$



これまで平面 (2次元) のベクトルについて述べてきたが、
空間 (3次元) のベクトルについても同様である。

$\vec{e}_1 = (1, 0, 0)$, $\vec{e}_2 = (0, 1, 0)$, $\vec{e}_3 = (0, 0, 1)$ とすると

任意の点 $P(a_1, a_2, a_3)$ に対して

$$\begin{aligned}\vec{OP} &= a_1 \vec{e}_1 + a_2 \vec{e}_2 + a_3 \vec{e}_3 \\ &= a_1(1, 0, 0) + a_2(0, 1, 0) + a_3(0, 0, 1) \\ &= (a_1, a_2, a_3)\end{aligned}$$

と一意的に書け, $\vec{OP} = (a_1, a_2, a_3)$ と $\vec{OQ} = (b_1, b_2, b_3)$ の内積も

$$(\vec{OP}, \vec{OQ}) = a_1 b_1 + a_2 b_2 + a_3 b_3$$

で定義されて,

$$\vec{OP} \perp \vec{OQ} \iff (\vec{OP}, \vec{OQ}) = 0.$$

$\vec{e}_1, \vec{e}_2, \vec{e}_3$ は完全正規直交系である。

4次元以上になると矢印の絵を描くことは出来ない。

⇒ 成分表示を用いればよいのでは？

一般に、 V_n を n 個の実数の組 $\mathbf{f} = (a_1, a_2, \dots, a_n)$ 全体の集合とし、

$\mathbf{f} = (a_1, a_2, \dots, a_n)$, $\mathbf{g} = (b_1, b_2, \dots, b_n) \in V_n$ と実数 λ に対して

2次元, 3次元の時の類推で和, 実数倍, 内積を

$$\mathbf{f} + \mathbf{g} = (a_1 + b_1, a_2 + b_2, \dots, a_n + b_n),$$

$$\lambda \mathbf{f} = (\lambda a_1, \lambda a_2, \dots, \lambda a_n),$$

$$(\mathbf{f}, \mathbf{g}) = a_1 b_1 + a_2 b_2 + \dots + a_n b_n.$$

で定義すればよいだろう。

このとき、 V_n はベクトル空間？

- 大学での (実数体上の) ベクトル空間の定義

定義 1. (ベクトル空間)

集合 V が次の条件 (I), (II) を満たすときベクトル空間という:

(I) V に和が定義されていて次を満たす:

(i) $\mathbf{f}, \mathbf{g}, \mathbf{h} \in V$ に対して

$$\mathbf{f} + \mathbf{g} = \mathbf{g} + \mathbf{f}, \quad (\mathbf{f} + \mathbf{g}) + \mathbf{h} = \mathbf{f} + (\mathbf{g} + \mathbf{h}).$$

(ii) すべての $\mathbf{f} \in V$ に対して $\mathbf{f} + \mathbf{0} = \mathbf{f}$ をみたす元 $\mathbf{0} \in V$ が存在する.

(iii) 任意の $\mathbf{f} \in V$ に対して $\mathbf{f} + \mathbf{g} = \mathbf{0}$ をみたす $\mathbf{g} \in V$ が存在する.

この \mathbf{g} を $-\mathbf{f}$ と表す.

定義 1. (ベクトル空間) 続き

- (II) 任意の実数 λ と $\mathbf{f} \in V$ に対して積 $\lambda\mathbf{f} \in V$ が定義されていて次を満たす:
- (iv) 任意の $\mathbf{f} \in V$ に対して $1\mathbf{f} = \mathbf{f}$.
 - (v) 任意の実数 λ, μ と $\mathbf{f} \in V$ に対して $(\lambda\mu)\mathbf{f} = \lambda(\mu\mathbf{f})$.
 - (vi) 任意の実数 λ, μ と $\mathbf{f}, \mathbf{g} \in V$ に対して $\lambda(\mathbf{f} + \mathbf{g}) = \lambda\mathbf{f} + \lambda\mathbf{g}$, $(\lambda + \mu)\mathbf{f} = \lambda\mathbf{f} + \mu\mathbf{f}$.

大雑把に述べれば, $\mathbf{f}, \mathbf{g} \in V$ と実数 λ に対して

$$\mathbf{f} + \mathbf{g} \in V, \quad \lambda\mathbf{f} \in V$$

が成り立てば O.K.

定義 2. (内積の定義)

ベクトル空間 V の元 \mathbf{f} , \mathbf{g} に対して実数を対応させる写像 (\mathbf{f}, \mathbf{g}) がつぎを満たすとき V 上の内積という :

(i) 任意の $\mathbf{f} \in V$ に対して

$$(\mathbf{f}, \mathbf{f}) \geq 0, \quad (\mathbf{f}, \mathbf{f}) = 0 \iff \mathbf{f} = \mathbf{0}.$$

(ii) 任意の \mathbf{f} , $\mathbf{g} \in V$ に対して

$$(\mathbf{f}, \mathbf{g}) = (\mathbf{g}, \mathbf{f}).$$

(iii) 任意の実数 λ , μ と \mathbf{f} , \mathbf{g} , \mathbf{h} に対して

$$(\mathbf{f}, \lambda \mathbf{g} + \mu \mathbf{h}) = \lambda (\mathbf{f}, \mathbf{g}) + \mu (\mathbf{f}, \mathbf{h}).$$

内積をもつベクトル空間を**内積空間**と呼ぶことにする.

2次元, 3次元の時と同様に, $(\mathbf{f}, \mathbf{g}) = 0$ のとき, \mathbf{f} と \mathbf{g} は直交するという.

V が内積空間の時,

$$\|\mathbf{f}\| = \sqrt{(\mathbf{f}, \mathbf{f})}$$

でノルムを定義すると, つぎが成り立つ:

定理 1.

V を内積空間とする. $\mathbf{f}, \mathbf{g} \in V$ と実数 λ に対してつぎが成り立つ.

- (i) $\|\mathbf{f} + \mathbf{g}\| \leq \|\mathbf{f}\| + \|\mathbf{g}\|$. (三角不等式)
- (ii) $\|\lambda\mathbf{f}\| = |\lambda| \cdot \|\mathbf{f}\|$.
- (iii) $|(\mathbf{f}, \mathbf{g})| \leq \|\mathbf{f}\| \cdot \|\mathbf{g}\|$. (シュワルツの不等式)

- シュワルツの不等式の証明

$\mathbf{f} \neq 0$, t を実数とすると

$$\begin{aligned} 0 \leq \|\mathbf{t}\mathbf{f} + \mathbf{g}\|^2 &= (\mathbf{t}\mathbf{f} + \mathbf{g}, \mathbf{t}\mathbf{f} + \mathbf{g}) \\ &= \|\mathbf{f}\|^2 t^2 + 2(\mathbf{f}, \mathbf{g})t + \|\mathbf{g}\|^2. \end{aligned}$$

任意の実数 t に対して 2 次不等式

$$\|\mathbf{f}\|^2 t^2 + 2(\mathbf{f}, \mathbf{g})t + \|\mathbf{g}\|^2 \geq 0$$

が成り立つので,

$$|(\mathbf{f}, \mathbf{g})|^2 - \|\mathbf{f}\|^2 \cdot \|\mathbf{g}\|^2 \leq 0.$$

$V_n = \{(a_1, a_2, \dots, a_n) \mid a_j \text{ は実数}\}$ は定義 1, 定義 2 を満たすので
内積空間である. V_n を**数ベクトル空間**と呼ぶことにする.

V_n の任意のベクトル $\mathbf{f} = (a_1, a_2, \dots, a_n)$ は

$$\mathbf{e}_1 = (1, 0, \dots, 0), \mathbf{e}_2 = (0, 1, 0, \dots, 0), \dots, \mathbf{e}_n = (0, 0, 0, \dots, 1)$$

を用いて

$$\mathbf{f} = a_1 \mathbf{e}_1 + a_2 \mathbf{e}_2 + \dots + a_n \mathbf{e}_n$$

と一意的に表すことが出来て,

$$(\mathbf{e}_j, \mathbf{e}_k) = \begin{cases} 1 & (j = k) \\ 0 & (j \neq k). \end{cases} \quad (j \neq k \text{ ならば直交する})$$

V_n は $\mathbf{e}_1, \dots, \mathbf{e}_n$ を完全正規直交系とする n 次元ベクトル空間である.

定理 2. (完全正規直交系の存在)

V を内積空間とする. V には完全正規直交系が存在する.

即ち, (有限個または無限個の) ベクトル $\{e_k\}$ が存在して,

V の任意のベクトルは $\{e_k\}$ の実数倍の (有限または無限) 和として表すことができる.

ここまでのまとめ

n 次元数ベクトル空間:

$$V_n = \{(a_1, a_2, \dots, a_n) : \text{各 } a_k \text{ は実数}\}.$$

V_n の完全正規直交系:

$$\mathbf{e}_1 = (1, 0, \dots, 0), \mathbf{e}_2 = (0, 1, 0, \dots, 0), \dots, \mathbf{e}_n = (0, 0, 0, \dots, 1).$$

V_n の任意のベクトル $\mathbf{f} = (a_1, a_2, \dots, a_n)$ は

$$\mathbf{f} = \sum_{k=1}^n a_k \mathbf{e}_k = a_1 \mathbf{e}_1 + a_2 \mathbf{e}_2 + \dots + a_n \mathbf{e}_n$$

と一意的に書ける.

ここで $n \rightarrow \infty$ とした場合を考えてみよう.

V_∞ を実数の無限列 $\mathbf{f} = (a_1, a_2, \dots)$ 全体の集合とし,

$\mathbf{f} = (a_1, a_2, \dots), \mathbf{g} = (b_1, b_2, \dots) \in V_\infty$ と実数 λ に対して

$$\mathbf{f} + \mathbf{g} = (a_1 + b_1, a_2 + b_2, \dots),$$

$$\lambda \mathbf{f} = (\lambda a_1, \lambda a_2, \dots)$$

で和と実数倍を定義することにより, V_∞ はベクトル空間になる.

内積も同様に

$$(\mathbf{f}, \mathbf{g}) = \sum_{k=1}^{\infty} a_k b_k = a_1 b_1 + a_2 b_2 + \dots + a_n b_n + \dots \quad (\clubsuit)$$

で定義すればよいだろう.

しかし, $\mathbf{f} = (a_1, a_2, \dots)$, $\mathbf{g} = (b_1, b_2, \dots) \in V_\infty$ に対して

$$(\mathbf{f}, \mathbf{g}) = \sum_{k=1}^{\infty} a_k b_k = a_1 b_1 + a_2 b_2 + \dots + a_n b_n + \dots \quad (\clubsuit)$$

は必ずしも有限な値にはならない.

実際, $\mathbf{f} = (1, 1, \dots)$ とすると

$$\|\mathbf{f}\|^2 = (\mathbf{f}, \mathbf{f}) = 1^2 + 1^2 + \dots = \infty.$$

ノルムが有限な値にならないと解析を行うには都合が悪い.

そこで, V_∞ の部分集合 ℓ^2 をつぎで定める:

$$\ell^2 = \left\{ \mathbf{f} = (a_1, a_2, \dots) \in V_\infty \mid \|\mathbf{f}\| = \sqrt{\sum_{j=1}^{\infty} |a_j|^2} \text{ が有限} \right\}.$$

ℓ^2 は内積空間となっているだろうか.

先ず, $\mathbf{f}, \mathbf{g} \in \ell^2$ のとき, $\mathbf{f} + \mathbf{g} \in \ell^2$ を確認しよう.

$\mathbf{f} = (a_1, a_2, \dots), \mathbf{g} = (b_1, b_2, \dots)$ に対して

$$\mathbf{f}_n = (a_1, a_2, \dots, a_n), \quad \mathbf{g}_n = (b_1, b_2, \dots, b_n),$$

とおくと, $\mathbf{f}_n, \mathbf{g}_n \in V_n$ だから定理 1 (i) (三角不等式) より

$$\begin{aligned} \|\mathbf{f}_n + \mathbf{g}_n\| &\leq \|\mathbf{f}_n\| + \|\mathbf{g}_n\| \\ \Leftrightarrow \sqrt{\sum_{k=1}^n (a_k + b_k)^2} &\leq \sqrt{\sum_{k=1}^n a_k^2} + \sqrt{\sum_{k=1}^n b_k^2}. \end{aligned}$$

$n \rightarrow \infty$ として

$$\|\mathbf{f} + \mathbf{g}\| = \sqrt{\sum_{k=1}^{\infty} (a_k + b_k)^2} \leq \sqrt{\sum_{k=1}^{\infty} a_k^2} + \sqrt{\sum_{k=1}^{\infty} b_k^2} = \|\mathbf{f}\| + \|\mathbf{g}\| < \infty.$$

よって、 $\mathbf{f} + \mathbf{g} \in \ell^2$. 定理 1 (ii) より $\lambda \mathbf{f} \in \ell^2$ は明らか.

⇒ ℓ^2 はベクトル空間.

また、定理 1 (iii) (シュワルツの不等式) より

$$\begin{aligned} |(\mathbf{f}_n, \mathbf{g}_n)| &\leq \|\mathbf{f}_n\| \|\mathbf{g}_n\| \\ \Leftrightarrow \sum_{k=1}^n |a_k| |b_k| &\leq \sqrt{\sum_{k=1}^n a_k^2} \cdot \sqrt{\sum_{k=1}^n b_k^2}. \end{aligned}$$

$n \rightarrow \infty$ として

$$|(\mathbf{f}, \mathbf{g})| \leq \sum_{k=1}^{\infty} |a_k| |b_k| \leq \sqrt{\sum_{k=1}^{\infty} a_k^2} \cdot \sqrt{\sum_{k=1}^{\infty} b_k^2} = \|\mathbf{f}\| \cdot \|\mathbf{g}\| < \infty.$$

よって、 ℓ^2 は内積 (♣) をもつ内積空間である.

$$\mathbf{e}_1 = (1, 0, 0, \dots), \mathbf{e}_2 = (0, 1, 0, \dots), \dots, \mathbf{e}_k = (0, \dots, 0, \overset{k \text{ 番目}}{1}, 0, \dots), \dots$$

は, ℓ^2 に属し,

$$(\mathbf{e}_j, \mathbf{e}_k) = \begin{cases} 1 & (j = k) \\ 0 & (j \neq k). \end{cases} \quad (j \neq k \text{ ならば直交する})$$

これより, 任意の $\mathbf{f} \in \ell^2$ は

$$\mathbf{f} = \sum_{k=1}^{\infty} a_k \mathbf{e}_k \quad (\text{但し } a_k = (\mathbf{f}, \mathbf{e}_k))$$

と一意的に書けるので, $\{\mathbf{e}_k\}_{k=1}^{\infty}$ は ℓ^2 の完全正規直交系.

ℓ^2 は無限次元の内積空間である.

2. 関数空間

$C[-\pi, \pi]$: 区間 $[-\pi, \pi]$ で定義された連続関数全体の集合.
連続関数の和および実数倍もまた連続関数.

⇒ $C[-\pi, \pi]$ はベクトル空間.

$f, g \in C[-\pi, \pi]$ に対して

$$(f, g) = \int_{-\pi}^{\pi} f(x)g(x) dx$$

とおくと, これは内積の定義を満たす.

⇒ $C[-\pi, \pi]$ はこの内積で内積空間となる.

このとき、シュワルツの不等式

$$|(f, g)| \leq \|f\| \cdot \|g\|$$

は次のようになる：

$$\left| \int_{-\pi}^{\pi} f(x)g(x) dx \right| \leq \left(\int_{-\pi}^{\pi} f(x)^2 dx \right)^{1/2} \cdot \left(\int_{-\pi}^{\pi} g(x)^2 dx \right)^{1/2} .$$

なお、 ℓ^2 でのシュワルツの不等式は以下のようになる：

$$\left| \sum_{k=1}^{\infty} a_k b_k \right| \leq \left(\sum_{k=1}^{\infty} a_k^2 \right)^{1/2} \cdot \left(\sum_{k=1}^{\infty} b_k^2 \right)^{1/2} .$$

j, k が非負整数のとき,

$$(\cos jx, \cos kx) = \int_{-\pi}^{\pi} \cos jx \cos kx dx = \begin{cases} 2\pi & (j = k = 0) \\ \pi & (j = k \geq 1) \\ 0 & (j \neq k), \end{cases}$$

$$(\sin jx, \sin kx) = \int_{-\pi}^{\pi} \sin jx \sin kx dx = \begin{cases} \pi & (j = k \geq 1) \\ 0 & (j \neq k), \end{cases}$$

$$(\cos jx, \sin kx) = \int_{-\pi}^{\pi} \cos jx \sin kx dx = 0.$$

⇒ $\{\cos kx\}_{k=0}^{\infty}$ と $\{\sin kx\}_{k=1}^{\infty}$ を合わせたものは直交系.

⇒ $C[-\pi, \pi]$ は無限次元.

もし、 $\frac{1}{\sqrt{2\pi}}$, $\left\{ \frac{1}{\sqrt{\pi}} \cos kx \right\}_{k=1}^{\infty}$ と $\left\{ \frac{1}{\sqrt{\pi}} \sin kx \right\}_{k=1}^{\infty}$ を合わせたものが

$C[-\pi, \pi]$ の完全正規直交系であれば、任意の $f \in C[-\pi, \pi]$ は

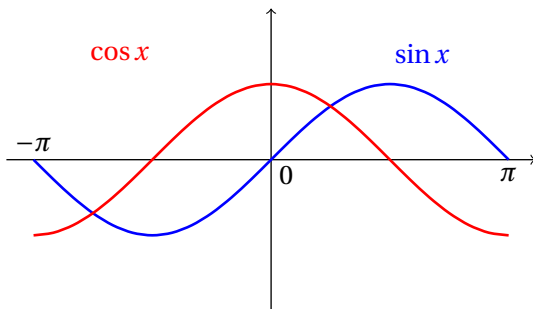
$$f(x) = \frac{1}{2}a_0 + \sum_{k=1}^{\infty} (a_k \cos kx + b_k \sin kx) \quad (\text{各 } x \in [-\pi, \pi]), \quad (\spadesuit)$$

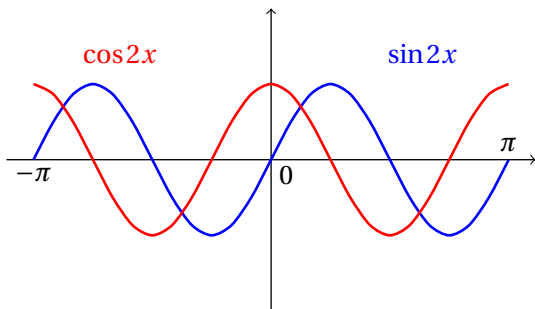
$$a_k = \frac{1}{\pi} (f, \cos kx) = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(x) \cos kx dx \quad (k \geq 0),$$

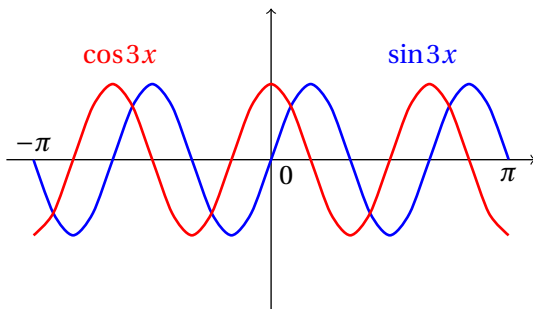
$$b_k = \frac{1}{\pi} (f, \sin kx) = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(x) \sin kx dx \quad (k \geq 1)$$

と書けることになる。

(\spadesuit) の右辺は f のフーリエ級数と呼ばれる。





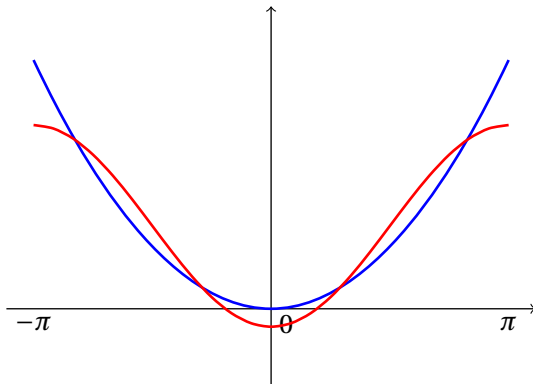


$f(-\pi) = f(\pi)$ をみたす「滑らかな」関数 (例えば x^2 , x^4 など) は (♠) の形に表すことが可能であることが知られている.

$$x^2 = \frac{\pi^2}{3} + \sum_{k=1}^{\infty} \frac{4(-1)^k}{k^2} \cos kx \quad (x \in [-\pi, \pi]),$$

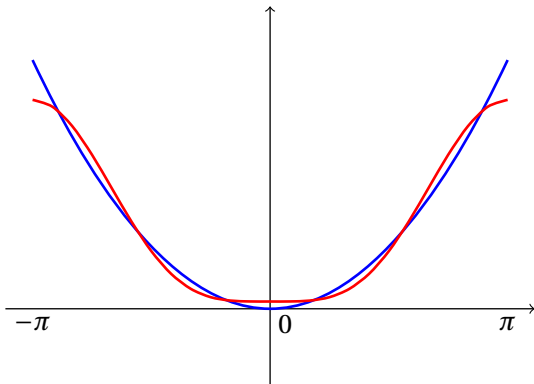
$$x^4 = \frac{\pi^4}{5} + \sum_{k=1}^{\infty} \left(\frac{8\pi^2(-1)^k}{k^2} - \frac{48(-1)^k}{k^4} \right) \cos kx \quad (x \in [-\pi, \pi]).$$

$\frac{x^2}{3}$ のフーリエ級数による近似



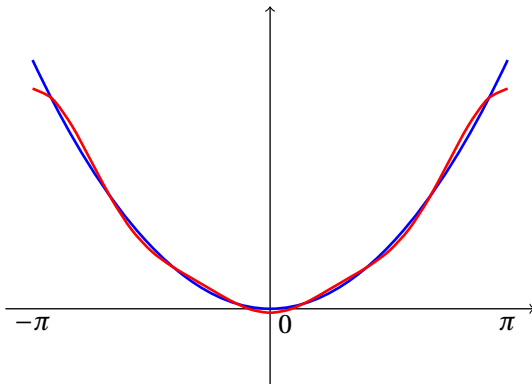
$$\frac{\pi^2}{9} - \frac{4}{3} \cos x$$

$\frac{x^2}{3}$ のフーリエ級数による近似



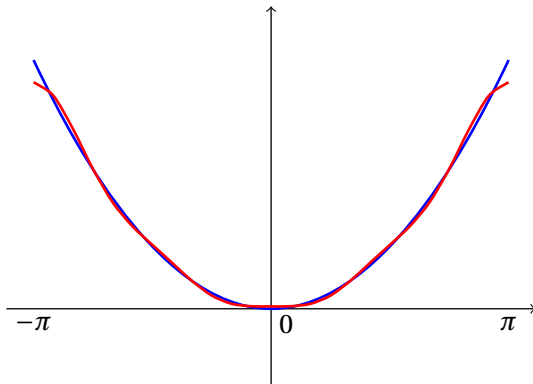
$$\frac{\pi^2}{9} - \frac{4}{3} \cos x + \frac{1}{3} \cos 2x$$

$\frac{x^2}{3}$ のフーリエ級数による近似



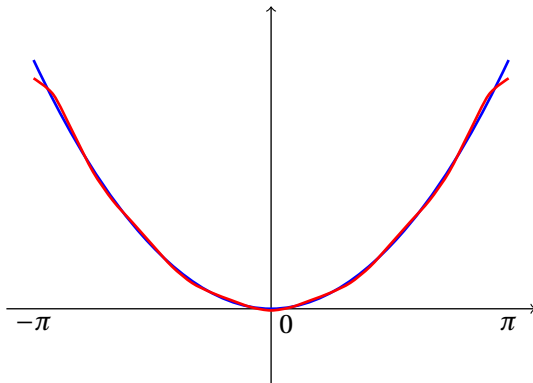
$$\frac{\pi^2}{9} - \frac{4}{3} \cos x + \frac{1}{3} \cos 2x - \frac{4}{27} \cos 3x$$

$\frac{x^2}{3}$ のフーリエ級数による近似



$$\frac{\pi^2}{9} - \frac{4}{3} \cos x + \frac{1}{3} \cos 2x - \frac{4}{27} \cos 3x + \frac{1}{12} \cos 4x$$

$\frac{x^2}{3}$ のフーリエ級数による近似



$$\frac{\pi^2}{9} - \frac{4}{3} \cos x + \frac{1}{3} \cos 2x - \frac{4}{27} \cos 3x + \frac{1}{12} \cos 4x - \frac{4}{75} \cos 5x$$

$f(-\pi) = f(\pi)$ をみたす「滑らかな」関数 (例えば x^2 , x^4 など) は (♠) の形に表すことが可能であることが知られている。

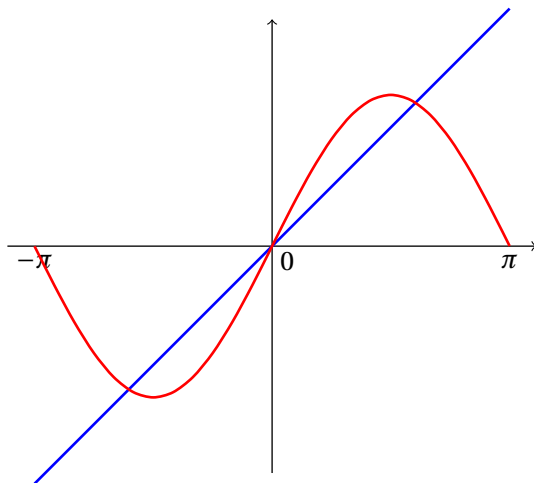
$$x^2 = \frac{\pi^2}{3} + \sum_{k=1}^{\infty} \frac{4(-1)^k}{k^2} \cos kx \quad (x \in [-\pi, \pi]),$$

$$x^4 = \frac{\pi^4}{5} + \sum_{k=1}^{\infty} \left(\frac{8\pi^2(-1)^k}{k^2} - \frac{48(-1)^k}{k^4} \right) \cos kx \quad (x \in [-\pi, \pi]).$$

$x = \pi$ を代入して整理すると ($\cos k\pi = (-1)^k$ なので)

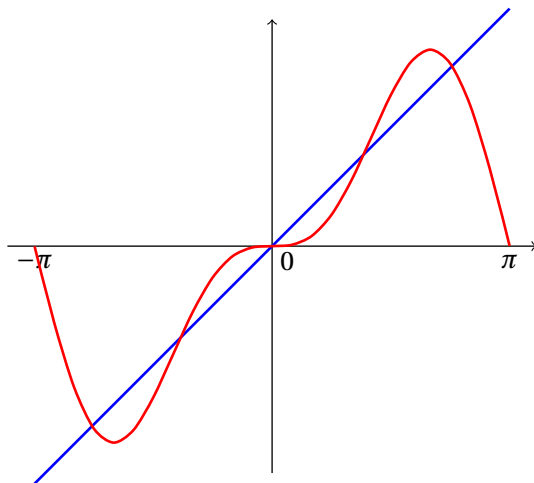
$$\sum_{k=1}^{\infty} \frac{1}{k^2} = \frac{\pi^2}{6}, \quad \sum_{k=1}^{\infty} \frac{1}{k^4} = \frac{\pi^4}{90}.$$

xのフーリエ級数による近似



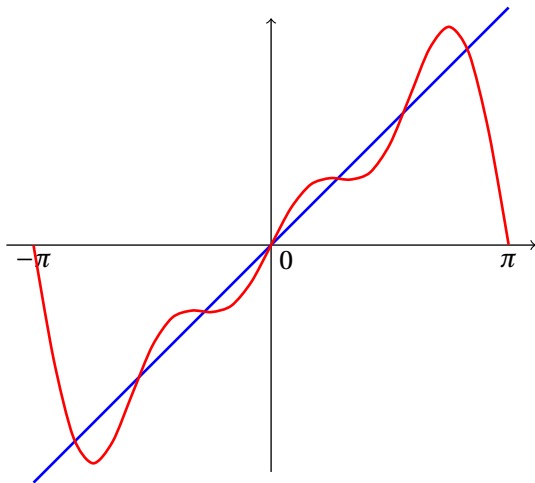
$$2 \sin x$$

xのフーリエ級数による近似



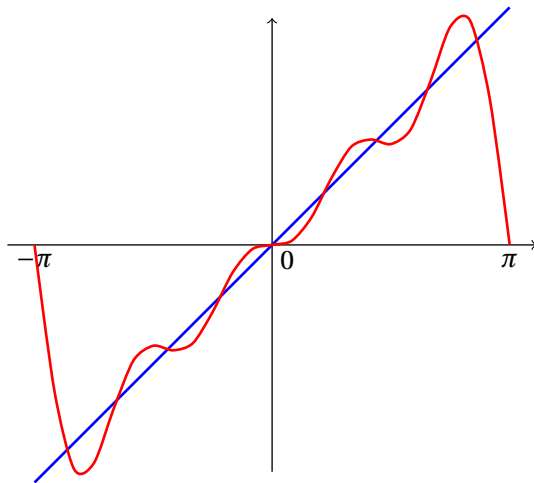
$$2 \sin x - \sin 2x$$

xのフーリエ級数による近似



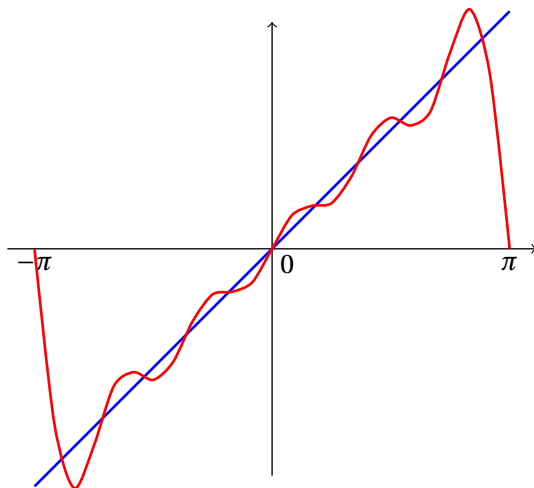
$$2 \sin x - \sin 2x + \frac{2}{3} \sin 3x$$

xのフーリエ級数による近似



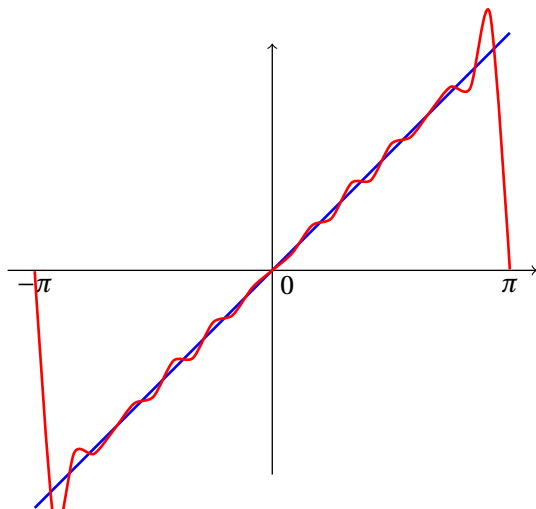
$$2 \sin x - \sin 2x + \frac{2}{3} \sin 3x - \frac{1}{2} \sin 4x$$

xのフーリエ級数による近似



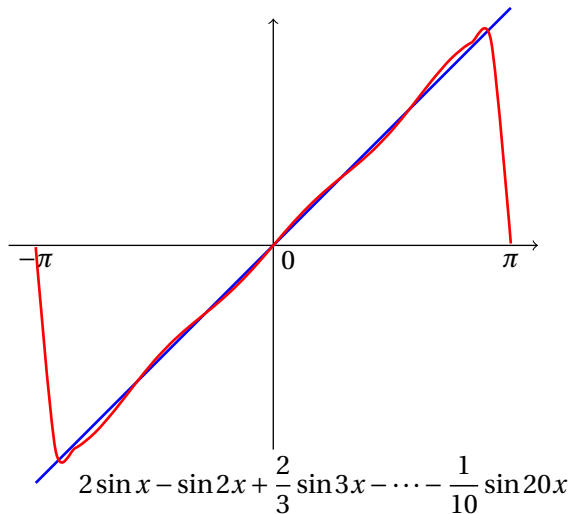
$$2 \sin x - \sin 2x + \frac{2}{3} \sin 3x - \frac{1}{2} \sin 4x + \frac{2}{5} \sin 5x$$

xのフーリエ級数による近似



$$2 \sin x - \sin 2x + \frac{2}{3} \sin 3x - \dots - \frac{1}{5} \sin 10x$$

xのフーリエ級数による近似



$C[-\pi, \pi]$ を内積を用いて完備化した空間を $L^2(-\pi, \pi)$ で表す.

$$C[-\pi, \pi] \subset L^2(-\pi, \pi) = \left\{ f \mid \int_{-\pi}^{\pi} f(x)^2 dx \text{ が有限} \right\}.$$

$L^2(-\pi, \pi)$ の任意の関数はある意味で

$$f(x) = \frac{1}{2}a_0 + \sum_{k=1}^{\infty} (a_k \cos kx + b_k \sin kx),$$

$$a_k = \frac{1}{\pi} (f, \cos kx) = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(x) \cos kx dx \quad (k \geq 0),$$

$$b_k = \frac{1}{\pi} (f, \sin kx) = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(x) \sin kx dx \quad (k \geq 1)$$

と一意的に表すことが出来る.

$\Rightarrow \frac{1}{\sqrt{2\pi}}, \left\{ \frac{1}{\sqrt{\pi}} \cos kx \right\}_{k=1}^{\infty}$ と $\left\{ \frac{1}{\sqrt{\pi}} \sin kx \right\}_{k=1}^{\infty}$ を合わせたものは

$L^2(-\pi, \pi)$ の完全正規直交系である.

ベクトルの大きさが定義された無限次元ベクトル空間 (Banach 空間) という舞台上, 抽象的な常微分方程式の解の存在・一意性などの研究および, その結果の具体的な偏微分方程式への応用を行っています.

熱の伝導

波の伝播

化学物質の反応

生物の個体数変化

⋮

⇒ 偏微分方程式で記述される



抽象的な常微分方程式として表すことが出来る

例

長さ π の針金の両端 $x=0$ と $x=\pi$ において温度を 0 度に保つ.

時刻 $t=0$ の針金の温度分布を $u_0(x)$ とする.

時刻 t , 場所 x の温度 $u(x, t)$ はつぎの微分方程式を満たす:

$$\frac{\partial u}{\partial t}(x, t) = \frac{\partial^2 u}{\partial x^2}(x, t), \quad 0 < x < \pi, \quad t > 0,$$

$$u(0, t) = u(\pi, t) = 0, \quad \text{(HE)}$$

$$u(x, 0) = u_0(x).$$

t を固定すると $u(x, t)$ は x の関数. 例えば $u(\cdot, t) \in L^2(0, \pi)$ とする.

対応 $t \mapsto u(\cdot, t)$ を $[0, \infty)$ で定義された $L^2(0, \pi)$ に値を取る t の関数と

見なすことが出来る. この関数を $u(t)$ と表すことにする.

$L^2(0, \pi)$ における写像 A を

$$[Av](x) = \frac{\partial^2 v}{\partial x^2}(x), \quad D(A) = \{v \in L^2(0, \pi) \mid v(0) = v(\pi) = 0\}$$

で定義すると, (HE) は無限次元空間 $L^2(0, \pi)$ における常微分方程式

$$\begin{cases} \frac{du}{dt}(t) = Au(t), & t > 0, \\ u(0) = u_0 \end{cases} \quad (\text{CP})$$

に書き換えることが出来る.

この解は「指数関数」を用いて $u(t) = e^{tA}u_0$ と表すことが出来る.

今の場合、 e^x の満たす関係式

$$e^x = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(1 - \frac{x}{n}\right)^{-n}$$

と類似の式

$$e^{tA} = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(I - \frac{tA}{n}\right)^{-n} \quad (\text{指数公式})$$

を用いて「指数関数」を定義することで、(HE) の解を得ることが出来る。

様々な偏微分方程式に対して「指数関数」を定義することを目指して、研究をしています。

「指数関数」について興味をお持ちの方は、バックナンバーにある第 108 話の田中先生のスライドも参照してみてください。